

# 骨・貝を削り、刻む

【縄文時代の骨角牙貝製品】 鹿児島県は火山灰土壌が多いため、遺跡に骨角牙貝製品はほとんど残りません。

これらが残りやすいのは、カルシウム分を多く含んだ貝塚もしくは洞穴遺跡です。

縄文時代の骨角器にはつり針があり、その形は現在の金属製の釣針と似ています。

弥生時代においても骨角製のつり針は使われており、高橋貝塚などで見つかっています。

貝輪は縄文時代から人が腕につけていたと思われすが、孔が小さいことから女性用と考えられています。

一方、弥生時代になるとゴホウラやイモガイなどの南島産の大型貝が貝輪の素材として利用されており、権力を持つ男性が腕に装着していたことが北部九州での出土例から明らかになっています。



骨角製のつり針（高橋貝塚）河ロコレクション



貝輪（市来貝塚）河ロコレクション



つり針は、鹿の骨などにも水につけて少しやわらかくしてから加工しているみたいだよ。

## 鹿児島県の伝統的工芸品

鹿児島県には、経済産業大臣から指定を受けた「国指定伝統的工芸品」が3品目、また、県の指定を受けた「県指定伝統的工芸品」が33品目あり、それらは昔ながらの材料・技術で作られています。

【川辺仏壇】 川辺仏壇の製作工程は、木地、彫刻、宮殿、金具、蒔絵、塗り、仕上げの7つの工程があります。

これらの材料や作る時の道具には、今回の企画展で紹介している素材（金属、石、土、繊維、木、貝）が全て含まれています。石は砥石、土は砥の粉、貝は蒔絵の青貝等です。

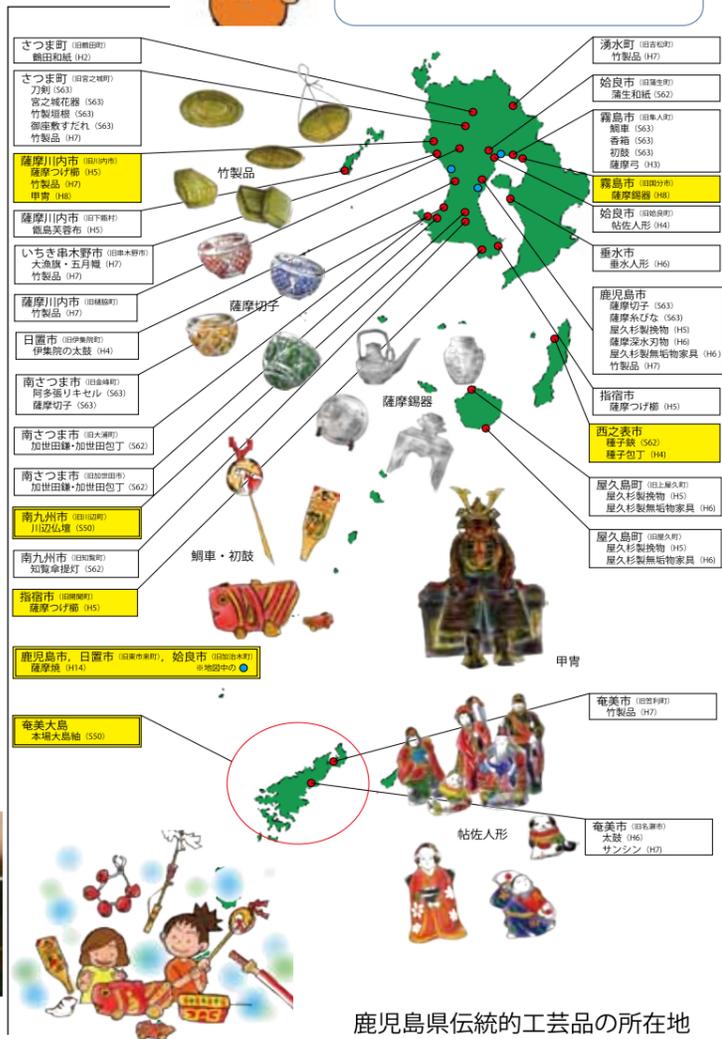
川辺仏壇は古の職人技を集約し、現在に伝える象徴とも言えます。



木を彫る工程

絵を描く工程

写真：川辺仏壇協同組合



鹿児島県伝統的工芸品の所在地



企画展データファイル 48

2017.4.22 ~ 2017.7.2

お問い合わせ  
 (公財)鹿児島県文化振興財団  
 上野原縄文の森  
 〒899-4318  
 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森1-1  
 TEL 0995-48-5701 FAX 0995-48-5704  
 URL <http://www.jomon-no-mori.jp>  
 E-mail [uenohara@jomon-no-mori.jp](mailto:uenohara@jomon-no-mori.jp)

職人技が発揮されるのは、長年の経験で培われ受け継がれた高度な技術はもとより、それぞれの材質の特性を熟知し巧みに活かしていることにあります。

今回の企画展では、「蘇る SHOKU」の第3弾として、「職」をテーマに鍛冶、石工、焼き物、織る・編む、木製品、骨・貝製品などにみられる古の職人技を紹介するとともに、伝統的工芸品も併せて展示することで、現代につながる鹿児島のモノづくりの原点を探る機会にします。

## 金属を溶かし、形づくる

【金属の伝来】 日本に本格的に金属器が伝わったのは弥生時代です。青銅器は銅に錫を混ぜた合金で、溶かした金属を型に流し込んで作る鑄造によって道具が作られました。

鹿児島県内でも弥生時代中期（約2,100年前）の土器と一緒に、銅戈と銅鑿が出土しています。これらの道具は鹿児島県内で作られたものではなく、当時の先進地であった九州北部から持ち込まれたものと考えられています。型に金属を流し込み、2mm以内の薄さにするには、相当な技術を要したことでしょう。



銅戈（下鶴遺跡）、破鏡（本御内遺跡）



鑄造は金属を溶かして、型に流し込んで製品を作る方法だよ。型に流し込むことで同じ形のものが早く大量にできるよ。



異形鉄鏃（町田堀遺跡、立小野堀遺跡）



鍛造とは、金属を叩いて製品を作る方法だよ。叩くことで金属の結晶が整えられ、内部の空気も押し出されて、粘り強い製品ができるよ。

【金属の加工技術】 高温で溶けた青銅は、型さえあれば様々な形に加工できます。

鹿児島県内では、弥生時代の遺跡から、鑄造された青銅製の武器や工具、鏡が出土しています。

古墳時代になると、青銅器は鏡や鈴など祭祀に使われるものが作られ、武器や工具などには固い鉄が使われるようになりました。

鉄は鑄造されることもありますが、鍛造によるものが主流です。鉄を熱して柔らかくなったところで、強く叩くことによって不純物を飛ばしながら形を整えていきます。

展示資料データ	遺跡数	展示資料数 (点)	展示パネル数 (枚)
	41	284 (一括展示含む。)	119

【次回 第49回企画展のお知らせ】 開園15周年記念「縄文ワールドかごしま」  
 平成29年7月14日(金)～11月5日(日)

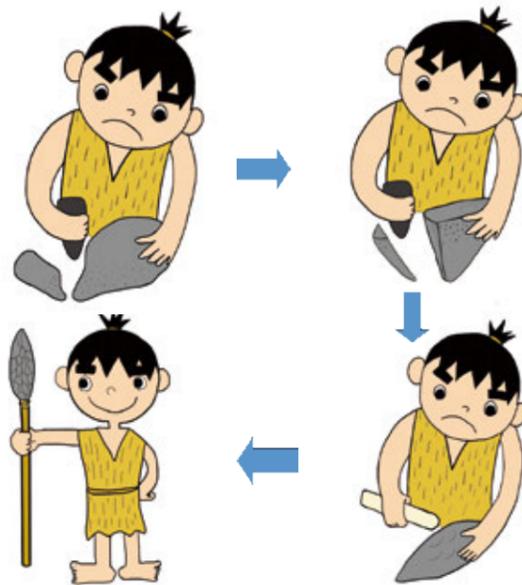
# 石を打ち欠き、磨く

【石器の製作方法】旧石器時代の石器は、柄などの木の部分は腐ってしまい、刃の部分だけが残っており、本来の姿や使用方法ははっきりしていません。

石器の製作方法は、道具の機能にあった石質を見極めることから始まります。

例えば、切ったり突き刺したりするような機能であれば、鋭く尖った割れ口をもつような石質が向き、頁岩や黒曜石などが利用されました。

選んだ母岩を加工しやすいように調整を行い、そこから剥片を剥ぎ取っていきます。目的どおりの剥片が得られれば、その剥片を加工して石器としての機能を高めていきます。



剥片尖頭器 (桐木耳取遺跡)

ガラスみたいに良く切れる石を選ぶところから、昔の人の道具作りは、始まっているんだね。



# 土を捏ね、文様をつける

【土器製作の歩み】粘土を焼くことによって形が変わらなくなる性質を利用し、土器を作り始めたのが縄文時代です。

縄文土器は、粘土で器の形を作り、貝殻や撚り紐などで多彩な文様を施されているのが特徴です。

弥生土器は、文様は施されていないものの、均整のとれた優美な形に仕上げられています。

古墳時代には、登り窯で焼かれた須恵器が加わります。

このように、現在の薩摩焼につながる焼き物の歴史は、13,000年前にさかのぼっているのです。



粘土の帯の上に貝殻で文様を入れています。

深鉢 (三角山遺跡【県指定文化財】)



弥生土器 (甕、壺、鉢など) や須恵器など



白薩摩 黒薩摩

【薩摩焼】薩摩焼の種類は、大きく「白薩摩」と「黒薩摩」に分けられます。白薩摩は象牙色の表面に貫入と呼ばれる細かなヒビが入っているのが特徴です。黒薩摩は黒い光沢を持ち素朴な温もりを感じさせます。「薩摩焼」は、「大島紬」「川辺仏壇」と共に「国指定伝統的工芸品」に選ばれ、昔ながらの伝統的な技術を現代にも伝え愛されています。

# 繊維を紡ぎ、編む

【カゴ編みの復元】遺跡からみつかる縄文時代のカゴ類は、当時から水漬けの状態であつたため、腐ってしまっていて見ることができません。

鹿児島県内では未だ実物のカゴ類の発見はありませんが、土器の底に布の跡など圧痕として残っている例が多くみられます。

これは、土器を製作するときに回しやすくするための敷物として使われたもので、当時不要となったカゴ類を再利用したと考えられています。

圧痕のモデリングをつくと当時の状況がよくわかり、組んだり編んだりしたカゴや敷物などが甦ってきます。



土器の底に残った圧痕 (芝原遺跡)



布のつなぎ目がわかる土器 (永吉天神段遺跡)



復元された縄文服 (尾関清子氏製作・監修) 立命館大学保管

【アンギン編み】横糸に2本の縦糸をからませながら編んでいく方法で、アンギンと呼ばれています。一枚の編布の中で、縦糸の間隔を変えることによって、デザインも考えながら編まれています。植物繊維で復元された編布は非常にしなやかなもので、縄文時代の衣服のイメージが大きく変わります。

# 木を彫り、組み合わせ

【弥生・古墳時代の木工技術】木製品は腐ってしまうので、水で空気が遮断された低湿地遺跡でなければ現在まで残ることはありません。

鹿児島県内では低湿地遺跡の調査事例はそれほど多くなく、弥生時代以降の遺跡が主です。

弥生時代から古墳時代にかけての木製品は農具が多く、鍬や鋤が発見されています。

鍬の三叉になった刃先は鋭い工具によって作り出されており、鉄器を使ったことが考えられます。また、鍬先と柄は別々に作られおり、紐で縛って固定することによって鍬として使えるようにしていたようです。



三叉鍬、鋤など (京田遺跡)



地層に多く水を含んだ遺跡では、水に守られたおかげで、鍬や鋤などの木製の道具や漆で塗られた碗や下駄などもみつかるよ。昔の人たちが使っていた道具なんだ。